



北海道バスケットボール協会  
指導者育成専門委員会  
2009/12/ 9(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 61

新潟国体北海道少年男子監督 日下部監督からの報告と提言

## 『新潟国体に参加して』

少年男子監督 日下部二郎

大変遅くなりましたが、少年男子の国体参加報告をさせていただきます。国体に向けて道外遠征などもさせていただいたのですが、結果は一回戦で高知県に1点差で敗れ、皆様のご期待に沿えず誠に申し訳ありませんでした。また、国体参加につきましては、北海道バスケットボール協会の皆様はじめ多くの皆様大変お世話になりました。この場を借りて、チームスタッフ・選手を代表して心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。本報告は、国体北海道予選での旭川選抜のチーム編成から述べて行きたいと思います。

### (1) 国体北海道予選会

#### ① これまでの旭川地区のチーム強化

国体は各地区協会にとって、選抜チームを組んでプレイヤー・コーチ両面で地区全体のレベルアップを図る貴重な機会です。旭川地区協会でも毎年、チーム創りはかなり時間をかけます。私も旭川工業高校前野和義先生や旭川実業高校相馬真吾先生から、選抜チーム創りのノウハウをしっかりと教わりました。私の場合、選抜チームは、1回3~4時間の練習を15回以上、社会人とのゲームを3回以上行うのが目安で、これに加えて遠征を行って道予選に臨むのが常です。

#### ② 今回の旭川選抜チーム編成

さて、今回は今までのチーム創りは出来ませんでした。旭川西高校がインターハイに出場したこととその後の旭川西高校・旭川工業高校の遠征日程の都合などで練習時間が取れませんでした。やむなく、インターハイ北海道予選でベスト4に入った旭川西高校・旭川工業高校の2チーム仕立てで国体道予選に臨み、戦い方の異なる2チームが交互に出場しました。

結果的にはこれが上手くいったのですが、あまり参考になさらないで下さい。各地区によって事情は異なるでしょうが、やはり手間隙かけてチームを創り、混成チームゆえの問題を解決していきながら、選手・コーチともに伸びるべきだと考えます。

緒戦の帯広選抜に単独の2チームがそれぞれ敗れる恐れは多分にあり、大変緊張して大会に入りました。何とか帯広選抜・函館選抜・札幌選抜の強豪を破り、旭川西高校・旭川工業高校それぞれのチームとしての取り組みの正しさは証明できました。しかし、このままでは全国では通用しません。

### (2) 新潟国体に向けてのチーム編成と強化

#### ① 基本構想

幸丸委員長が常々おっしゃっているように、中学のジュニアオールスターは、全道から選手を集めて様々な困難を乗り越え全国で輝かしい成果を上げているのに対して、高校ではエンデバー制度などがあるにもかかわらず中学の良さを踏襲していません。

これは、中学では全道にいい選手が散らばっていても、高校ではオール北海道と呼べるような強豪が1チームに集中していて事足りているからでしょうか。確かに傑出した強豪が単独チームで出た方が強いのですが、インターハイ・ウインターカップでその単独チームの強さを遺憾なく発揮してもらい、国体では上記国体北海道予選会で述べたように、当然勝利を求めつつも北海道全体のレベルアップにつながらないものでしょうか。

国体北海道予選会は各地区のレベルアップのためにも是非必要です。この予選を選手選考会と捉えて、優勝チームを母体として混成チームを組めないか。ここ数年、ジュニアオールスターの活躍を見て考えていました。

この構想について長年旭川選抜を率いて戦ってきた旭川地区協会長前野和義先生に話して快諾を得、札幌地区強化委員長佐々木睦己先生に相談して東海大四高校の選手派遣をこれまた快諾していただきました。札幌選抜監督長野雅男先生には前野会長からチーム編成について話していただきました。

## ② 今回のチーム編成

欲を言えば、優勝した旭川選抜から8名、札幌地区中心に他地区から4名で編成したかったのですが、旭川地区悲願の初優勝、しかも2チーム仕立てでの勝利ということもあり、旭川10名、佐々木睦己先生のご理解のもと札幌2名の編成となりました。過去にも他地区から補強を加えたケースもあったようですが、今回は補強ではなくチームの柱として札幌地区の2名に入ってもらいました。

スタッフとしては、コーチに旭川工業高校前野潤・旭川西高校秋月浩二両先生に入ってもらい、難しい構想に基づいたチーム創りに実に精力的に取り組んでくれました。

優勝チーム以外からも毎年数名の選手が選ばれば、俄然、地方協会の選手たちは活気づくのではないのでしょうか。また、アシスタントコーチにも他地区の指導者に入ってもらえば、より北海道全体がレベルアップすると思われれます。各地区から集まって練習するのは大変ですが、それを補って余りあるほど全国大会の舞台は素晴らしく、その憧れは大きいはずで。

## ③ 編成上の留意点

今回、札幌地区協会から須田侑太郎・西川貴之両君に参加してもらいました。他地区の選手を招聘する際の留意点として、次の3点を考えました。

- i 所属チームのスケジュールを優先すること。
- ii 交通費は協会が負担すること。
- iii 宿泊は特定チームの施設は利用せず、ホームステイとすること。

両君は、新潟国体直前に大切なウインターカップ札幌予選があるにもかかわらず、私が計画した練習日程の全てに参加し、土日は旭川でホームステイ、直前の5連休の千葉遠征も快く参加してくれました。長年にわたり北海道を代表している東海大四高校の器の大きさと懐の深さ、二人のやる気、佐々木睦己先生の心くばりに本当に頭が下がりました。この場で改めて御礼申し上げます。

## ④ 今回のチーム強化

今年の旭川の両チームは上背が無く、特別な身体能力を有する者もいなく、いわばチームで短所をカバーしながら戦うスタイルです。いいガードとシューター、コツコツ頑張る選手はいますが、対戦相手の黒人や各ブロックのエース級とやり合うチームの柱がいません。そこでかねての構想通り、旭川地区の柱を取り除いて、トップエンデバーに選ばれた須田・西川両君を前述の通り補強ではなく大黒柱としてチームを創りました。

練習でもこの二人は柱でした。違う環境・違うメンバーを全く問題にせず先頭に立って練習し、コーチの狙いに応えるべく全力でプレーしていました。この二人のプレーを思う存分引き出し、そこからできる崩れを使って旭川勢のシュート力を活かすゲーム展開を考えました。

千葉遠征も大きな成果でした。東京選抜の黒人と 2 枚シューターを抑えた千葉選抜の戦い方を参考に攻防を仕上げていきました。

### (3) 新潟国体 対高知戦

#### ① スカウティング

明德義塾の 201cm の黒人(アンゴラ)とインターハイで 33 得点を挙げたガードフォワードに加え、愛媛 1 位に対して 50 得点を挙げた高知南のフォワードと、中外こなす高知中央の 185cm のフォワードが要注意でした。黒人にヘルプが集中すると、他の日本人にやられる危険性がありました。ディフェンスは、黒人をゴール下に据えた変則マッチアップゾーンで、外へはかなりプレッシャーをかけてくるスタイルと見ました。

#### ② ポイント

ディフェンスでは、ディナイした後も執拗に足元に入るべき相手、オーブンスタンズで守り離しておいてよい相手、トラップに行くと潰すべきプレーというように的を絞りました。オフェンスでは、相手ゾーンに対するパス回し、西川のベースライン沿いシュートなどシュートの狙い所と合わせ、速攻などを確認しました。序盤は西川中心の攻めで、西川のプレーの幅の広さで黒人を揺さぶってゲームの主導権を握ろうと考えました。

#### ③ ゲーム展開

40分間一進一退でした。須田 30 得点、西川 26 得点で二人ともチームの柱としてしっかり貢献してくれました。ガード陣も黒人相手に果敢にトラップに行き、いい所でシュートを決め、フォワード陣もよく走り 3P も決めました。守っては、黒人に 33 得点されましたが相手日本人選手のいい所を封じて攻撃リズムを狂わせました。唯一の誤算はフリースローで、20分の 10 くらいだったでしょうか。

中盤、日本人シューターへのディナイと黒人へのトラップが効いている時に、もう一人の 185cm のフォワードへのつき方に明確な指示を出さなかったこと、こちらのキャプテンのカみを取らなかったこと、交代メンバーの中で 2 人の選手をコートに送り出せなかったこと、練習の中で旭川の選手と札幌の選手のシュートセレクションのすり合わせが足りなかったことが悔やまれます。

高知は続く福岡戦でも、黒人のいる時間帯は第 1 シード福岡を圧倒していました。我々が警戒した日本人選手が実によくシュートを決めていました。黒人がファールトラブルで 12 分程度しかプレーできず福岡が大勝しましたが、北海道も全国上位レベルと技術的にはそう大きな差は無いと感じました。

### (4) 今後に向けて

もちろん、チームはより最強になるよう編成し、試合は勝利にこだわるべきです。そのためには、国体北海道予選優勝チーム単独の編成や、時には高校単独チームに近い編成も必要なのは十分承知しています。しかし、他にいい選手がいて、その選手を加えることでより最強の北海道に近づくならば、思い切った国体北海道チームを組むべきです。それは今回のチーム創りで旭川の選手と須田・西川両君が身をもって示してくれました。能代工業のように単独チームで参加し三冠達成を目指すことも素晴らしいことですが、国体での勝利と北海道全体のレベルアップの両立も取り組むべき価値のあることではないでしょうか。

大変長文になり申し訳ありません。国体での勝利をもって混成チームの強さを示したかったのですが、それは次の機会にお預けです。今回、国体のチーム編成にかかわって投じた一石を吟味してみてください。